

CE

建設業界 ⑥

Civil Engineering

Volume 55, 2006

社団法人 日本土木工業協会

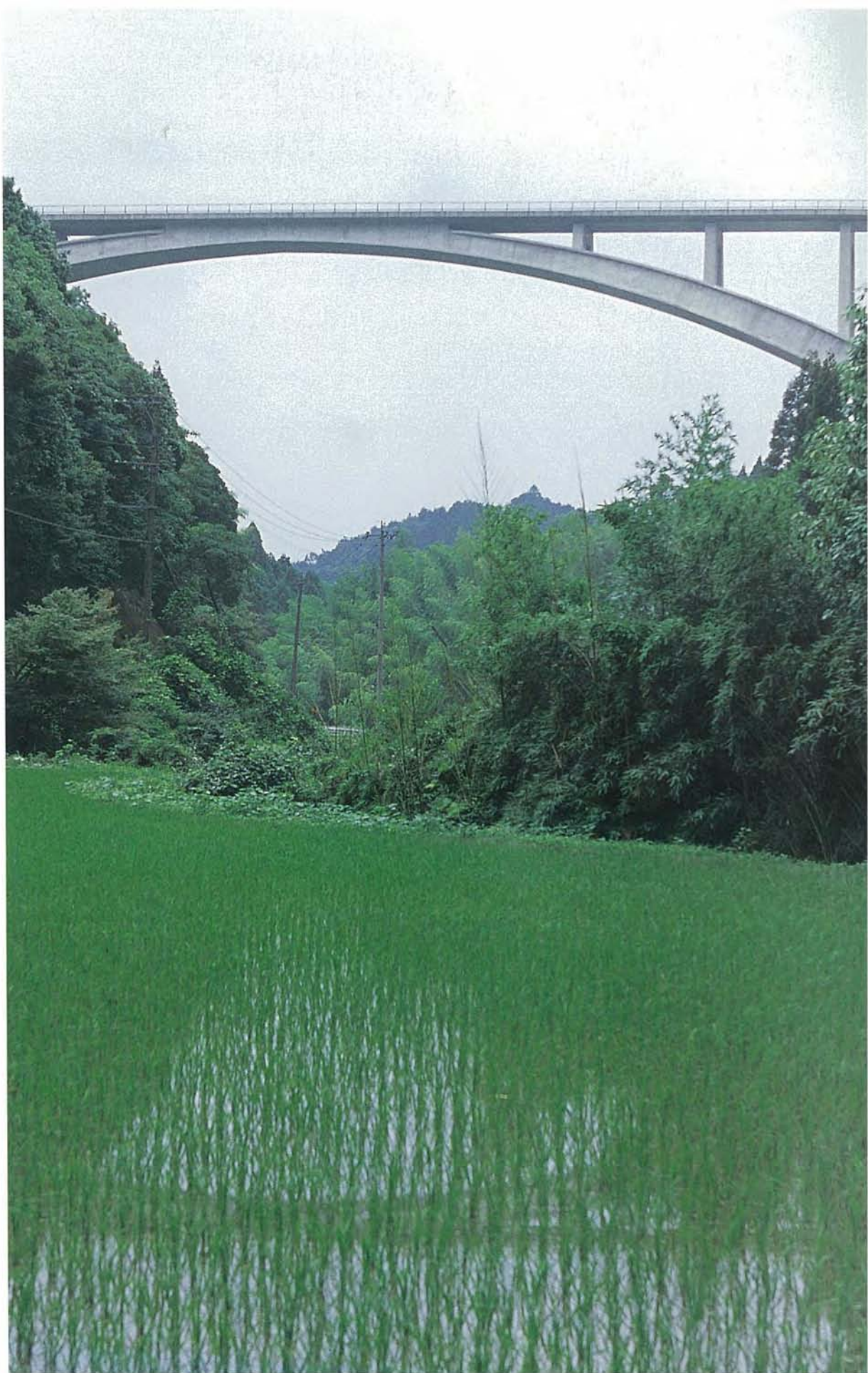
[報告] 平成18年度定時・通常総会を開催

建設業を国民から信頼され 魅力ある産業とするために

[フォトエッセイ] 橋を巡り、人を想う

朧大橋





CE Civil Engineering 建設業界 2006年6月号 [通巻649号]

発行所一社団法人日本土木工業協会 / 社団法人日本電力建設業協会 / 社団法人日本海洋開発建設協会

第55巻 / 第6号 / 1992年10月17日第三種郵便物認可
2006年6月20日印刷 / 2006年6月25日発行

● <http://www.dokokyo.or.jp> 定価400円 [1年分送料共4800円]

●フォトエッセイ
橋を巡り、人を想う

朧大橋

熱い人たちとの出会い

文——篠原修 Shinohara Osamu

政策研究大学院院客員教授・土木設計家

写真——平野暉雄 Hirano Teruo

Hirano Teruo

建設省から福岡県に向向している梶太郎さんから連絡が来て、久留米から奥八女に伸ばしている道路に橋を架ける、ついではその橋の面倒を見てくれないかという。

現地に行ってみると、架橋地点の手前には既に耳納大橋という橋が架かっていた。耐候性のメタルのブレーストアーチだった。正直のところ感心しなかったが、のっけから県の担当者の気分を害するのとも悪いと思い、口には出さなかった。

現場に立つと広川の谷は深く、山腹には茶畑、棚田、果樹、杉林が入り交じり、何故か気持ちは和らいだ。そうだよ、これが日本の農村風景なんだ、心の中でそう呟いた。対岸の平場の上にはやや大ぶりの建物が見える。「あれは下横山小学校です」上陽町の職員がそう教えてくれた。

設計を担当するコンサルタントは決まっていた。建設技術センターという名の、県の財団かと誤解しそうな会社だった。全く知らない。大丈夫か、不安がよぎった。それまでに初顔のコンサルタントとは何回かうまくいかないことがあったからだ。デザイン検討の会議は、本郷から白山通りに下る斜面の途中にあるホテルの一室が定番だった。案の定、初回のやりとりは惨憺たるものだった。東大教授という当方の肩書きのせいだろう、担当す

るエンジニアの案は妙に肩に力が入っていて現実の形には反映しがたいキャッチフレーズが並べられていた。

しかし担当の武末博伸さんは極めて熱心で、そして粘り強かった。次第に波長は合い始めた。これはいける。何回目かにそう感じた。社長の大津茂さんも熱心だった。社員にはいつも何らかの創意工夫を指示してきたのだという。また、自身がメーカーに勤めていた頃からの夢が土木学会田中賞をとることだったという（朧大橋は後日改めて福岡県初の田中賞に輝くことになる）。

会議にはもう一人、必ず出席する年輩の人がいた。いつも目立つ赤いネクタイだった。胸にはいつも木の葉の形がいた。妙な男だ。それが上陽町町長の牛島剛さんだった。この人は志願して、アーチメラン材の最後のポルト結合をやったのである。そんなことをやる市町村長の話は聞いたことがない。

開通式の日が良い天気だった。「あの小学校の児童は元気ですか」。最初に現地に来た

表紙、アーチリブの開き具合と垂直材の形がうまく整合するかどうか、これが朧大橋の重要なポイントだった。リブは放物線、直材は直線のテーパー、武末博伸の解き方は見事だった。

裏表紙、アーチ橋は不思議な橋だ。全体が見えなくてもイライラしない。足の伸び方が想像できるからだろう。僕の好みの谷の田圃からの見上げ。

架橋地点の周囲は棚田と茶畑の風景だった。久方振りに日本の山村風景を見る思いだった。ただし、ここは九州故か明るい山村である。





①

- ①橋の袂に設けた広場。対岸の山腹は緑に埋め戻した。橋上は高欄照明。橋の上にぼんやり見えるのがかつての下横山小学校。その児童のためにと思ったのだが。
- ②上陽町(八女郡)には、あたかも計画したかのようにスパン数が1から4の4つの石橋がある。これは2径間の寄口橋。シャープな線の石橋である。
- ③1径間の洗玉橋。アーチの形はオーソドックス。高欄はどこか愛嬌のある石の造形。この束柱はどこかで見た形、そう長崎は中島川の公園の高欄の形だ。
- ④3径間の大瀬橋。良いプロポーションだ。昔からこういうアーチを見ていたので、龐大橋のアーチにも抵抗感がなかったのだろうか。
- ⑤宮ヶ原橋。これは最多の4径間。やっぱり自然石の風合いにはかなわないと思う。かといって今さら石橋には出来ない。鉄とコンクリートの時代の我々は苦しい。



②

とき以来、龐大橋のテーマは僕の心で決まっていた。大人になってもいつまでも心にある風景、それを原風景と呼ぶ。その原風景は小学校から中学校の時期に形成される。龐大橋は下横山小学校児童の原風景の一部になるのだ。龐大橋は原風景にふさわしい橋にしなければならぬ。

この思いをあいさつで喋ろうと考えていた

ので、児童はと訊いたのである。「いや、下横山小学校は本年度限りで廃校になりました。茫然とした。間に合わなかった。あいさつではその思いと無念さを正直に語った。会場から笑いと微笑の音があがった。笑われても満足だった。龐大橋にかけた思いが伝わればよいのだ。

その後、大津さんと武末さんには時折会う。

ただし、場所はいつも東京である。願わくば田植の頃の棚田で、蛭とびかう広川畔で、柿実る橋の袂の交流センターで会いたいものだと思う。竣工後訪れた交流センターで食べさせてもらった野菜料理はうまかった。柳川の一流料亭のものより断然うまかった。その農家のおばさんの声と谷に架かる橋のむこうに見える茶畑を今もなつかしく思い出す。



③



④



⑤